

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月25日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520594

研究課題名（和文）

歴史における生活・生態史の連鎖と断絶—水辺集落の構成と展開—

研究課題名（英文） Continuity and Discontinuity in a History of Life and Ecology
—Structure and Development in Villages at the Waterside Area

研究代表者

蔵持 重裕（KURAMOCHI SHIGEHIRO）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：70153369

研究成果の概要（和文）：

成果の第1は史料の所在の確認に関することである。滋賀県北部はかつて『群志』類によって多くの史料が知られていたが、近年その所在が不明なものも少なくない。今回の調査では目指していた慶長の検地帳は発見できなかったが、旧大浦荘庄村の殿村家文書の一部発見、旧志賀町の伊藤家文書の所在確認などができた。第2に長浜市西浅井町黒山の石造物群の調査が終了したいことである。ここでは在銘のものは発見できなかったが、種別など図示化することによって、今後の保存にも有効と考える。

研究成果の概要（英文）：

The first result is that we can confirm where the historical documents, which we have been searching, are. Many historical documents of the north of Shiga Prefecture appeared in many *Gunshi* and were known well, but some of the documents are missing in recent years. Though our goal was to find out the land survey in Keicyo, we could not find it. But we were able to find some documents of Tonomuras in old Oourasousyou and confirm where documents of Itos were.

Second, we have finished an investigation of stone statues of Buddha in Kuroyama, Nishiazaicyou, Nagahama city. Though we could not find the statues inscribed a name and date, we could show it in a diagram. We can say that the diagram will be effective to preserve.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世村落・近江・水辺集落・村の古文書

1. 研究開始当初の背景

筆者はかつて山間部荘園の地域研究を行った。しかし、考えてみれば各地域は必ず交

通があつて成立する。ここでの交通とは狭い意味での物資の交易だけではない。そして人と人とのつながりはもちろんである。さらに

人と自然との関わりを含めて捉え、はじめて交通と言えらるであろう。その場合、人の棲む、自然的・地理的な立地は大きな意味を持つ。そして、こうした人と自然の関係と言った場合生態的な視点、分析が必要となってくる。ただし、この課題は多くの人に了解できるとしても、前近代に於いてその研究を進めることはなかなか至難である。なぜなら、歴史学の方法の基本である史料そのものの存在が不安定であるからである。したがって、この基本＝資料の所在確認、調査をまず進めなければならないことになる。

2. 研究の目的

1でも述べたように筆者はかつて山間部荘園の調査を進めた。本研究は、日本の中世・近世を中心に、特に水辺集落に焦点をあてて、集落の周辺集落との交流と対立の有り様を追究することによって、その生活・生態の歴史的展開とその意味について明らかにすることを目的とした。水辺は海・湖・池・川と岸・段丘・陸と異なる世界の接する場である。それ故であろう、生命の発生から発育の活発なところである。人間も例外ではなく太古から集落は段丘状にあっても、採集・漁労など生業、いわば生命活動は水辺にあったといえる。その意味で水辺なくして人類は勿論、生物の生命活動はなく、人々の生態的な活動をみるには格好のステージである。

一方で、自然も活発な動きをし、その自然環境が激しく表現される場でもあった。地球の温暖や寒冷による海進や海退はいうまでもなく、地震による岸辺の変動、あるいは津波による陸上の集落も含む景観の破壊、河川の流路の変動、それがもたらす領域の境界の変動、河川の土砂の堆積による潟の形成や変動など、水辺はまさに自然の生態そのものであった。

したがって人間はその変動にさらされ、集落の形成から破壊、境の相論などさまざまな生き様を見せた。一方で、陸路の交通・輸送から、水辺で船運に転換し、大量の物資輸送を手がけたのも人間の古くからの知恵で、葦の生える水辺に小魚が寄るように、人々は岸辺の市・集落・湊に吸い寄せられたのであった。

このように水辺は人間生態の集中点であり、変動の激しいところであり、多様性のある場であった。そこでは発生と消滅、継続としての変換と断絶が繰り返されたところであった。それは、古代・中世・近世という古

くから通年化している時代区分とも異なる、地域毎に生態の時期区分がある。歴史のダイナミズムを伝統的政治史とは異なる視点から眺めることができる。

3. 研究の方法

比較的研究の豊富な近江国をフィールドに、前提としての基本的な史資料の調査発掘に心がけた。具体的な研究対象としては、琵琶湖周辺集落を取り上げた。同地域については、中世以来の村落史料が、全国的にみて最も豊富に残されていること、村落研究においても最も研究蓄積が厚い。そのため中世・近世を対象にした村落研究を進めるにあたり、最も効果的に行うことができる。その琵琶湖周辺地域のなかでも、さらに具体的な事例として、(1) 湖北の菅浦村、(2) その「後背」部、山間地に位置する庄村(大浦上荘)、(3) 中部・湖西の小松村、を取り上げる。同じ水辺といいながら、様相が大きく異なる地域を取り上げることで、地理的・自然的環境、政治的条件の共通性と差異性、それによる集落の有り様の特質について明確に把握することができる。

主として(1)では周辺村落との、異なる生業集落同士の交流と対立、(2)では庄村と湖岸集落との結びつきと独自性、そして大浦上荘内部での山利用での相論、(3)では湖対岸の湖東地域から京都までにわたる広域的な地域交流の有り様、に注目する。

そして各村落について、中世文書・近世文書の調査・蒐集(撮影・翻刻)・分析を行うと共に、上記に示した水辺の特性に基づき、集落景観や生活様式の変遷を把握するための石造物調査・聞き取り調査などのフィールドワーク調査を精力的に行い、その実態を把握する。特にフィールドワーク調査については、地域情報を持つ老人が急速に失われつつあるため、後世における研究のためにも、現在において緊急の課題である。

このうち近世文書については、いまだ多くが公開されていない状況にあるため、蒐集文書についての目録作成、未翻刻史料についても分量的に可能な範囲で公開をすすめていく。また石造物調査・聞き取り調査などフィールドワーク調査の成果についても、報告書にすべてのデータを記録し、後世の検証を可能となるかたちをとる。

4. 研究成果

研究の成果は以下の諸点にまとめられる。
(1) 資料の所在調査である。湖北を中心に周知は多くあるが、これらは限られた地域であるので、大浦庄内の史料調査を行った。その中で、大正13年(1924)10月5日に永原村郷土史資料展覧会があったことが分かった。その出品目録に、その時点での永原村の史料の全貌が分かる。これを手がかりに、所在確認を進めた。その中で慶長7年の検地帳が八田部、山田、月出で確認できるが、調査では全くその所在は不明で、土地の方も知らないと言うことであった。殿村家文書はお宅の都合で調査の御協力が得られなかったが、幸い菅浦阿弥陀寺の秋山富男氏が一部分コピーをお持ちであったので、それを拝見させていただいた。

①大浦の蓮敬寺はかつて舟問屋であったことから近世文書を中心に文書の所蔵が知られていた。御住職のご厚意で全体を調査させていただいた。収蔵されていた箱は3つであったので、ABCとして分類し、A(11点)、B(51点)、C(58点)であった。帳面も含まれるので実際の史料量は遙かに多いことになる。

②同じ菅浦の本照寺でも資料調査を行った。資料はA(2点)・B(18点)・C(2群)・D(4点)・E(1個)・F(1個)に分け、文書のA・Dについては報告書に載せた。本照寺文書では真宗の講の史料が知られている。

③菅浦ではいままで本格的な調査の無かった「左近次郎家文書」2点・「左近四郎家文書」3点の調査ができたのは意味がある。前者は竹生島蓮華会の頭役にかかわる文書である。後者は菅浦大明神修造関係史料と左近四郎家家来の処遇に関するものである。ただし、これらは「菅浦史料館」に展示してある文書のみであるため全貌ではない。いずれも報告書に掲載した。

④本研究の最大の成果の一つは旧志賀町の「伊藤晋氏所蔵文書」の発見である。発見と言っても、すでに『滋賀町史』で調査され学界でも知られてもいたが、その後所在不明とされていたものである。伊藤家の菩提寺である種徳寺に調査に出向いた際、御住職の心山義昭氏より、同寺で所蔵されていることが知らされ、調査したものである。御住職の話では、伊藤家より、移転の際、保管の依頼を受けて所蔵していたとのことであった。今回は『滋賀町史』の成果の上に新に翻刻したものである。なおその後、心山氏はこの文書を滋賀大学経済学部附属史料館へ寄託し、史料の保管に万全を期したと聞く。

(2) 文書史料ではないが、西浅井町黒山の通称「黒山石仏群」の調査を行った。この石

造物群は地元では、天正11年(1583)賤ヶ岳の合戦で敗れた柴田勝家家臣の家族が身内を弔ったものという伝承がある。また、この集落は敦賀に抜ける街道沿いで、かつては200戸もあり、寺院ばかり40もあったという。元々はそれらの寺院にあった石仏等とも言われている。また、現状は東光院境内に整頓されているが、整備する前は、神社の境内から発掘されたものであるという。

調査は全体を、A・B・C・Dの4つブロックに分け、五輪塔、宝篋印塔、石仏などの種別に、その個数を確認し、その配置を概略図に落とたものである。個数の多いCブロックでは238基を数えるが、Bもほぼ同数ある。ただし、残念なことに年紀の判明する、在銘のものは無かったことである。5尺から6尺の大きなものは形状から見て鎌倉時代と判断しても良いが、確かなことは断定できない。いずれにしても賤ヶ岳合戦より遙か前よりこの地域に蓄積された宗教的遺産であることは間違いない。少なくとも黒山の地が宗教的な意味合いの強い地・集落であったことは間違いないであろう。推測をたくましくすれば、「黒山」とは通常、人跡の入らない山地を意味するから、そのような聖地であったところが開発され、聖地の遺物を人々が整理し、祭ったということであろうか。

(3) 基礎的な調査に終始した本研究であるが、以下の諸点をまとめとしておきたい。

①旧大浦荘域では、湖畔＝水辺部を含む下荘と内陸・山間部上荘とは意外と結びつきが強くはないこと。例えば山の利用に於いても、下荘では葛籠尾崎の山利用があり、上荘側との交流は少ない。むしろ上荘が槇・材木を湖上輸送するときに下荘との交流があるが、それも主としては上荘は陸路で湖西方面に進めることが多い、そして海津・今津などから輸送するという。おそらくこれは大津方面から敦賀に抜ける街道の存在が影響して、そのルート上での人々の結びつきが強いと思われる。荘園という支配関係の区分ではなく、人と物資のルートの区分が生きているということである。

②湖の利用、特に漁業の性格である。これは湖西の小松地区で顕著であるが、前面に湖水があれば必ず漁業を生業にすることは限らないということである。これは湖底の岩石、土壌の問題であるらしいが、魚が多く生息、棲む湖域が決まってくるらしい。魚の生息が豊富などころでは当然、漁業は盛んに行われるが、そうでない集落は内陸の農業に専心することになる。

鶴川をめぐる争いがかつてあったが、これ

も川そのものを争うのではなく、鵜川が良い漁場を造るので、いわば漁場の争いであった。川が琵琶湖に流入するあたりは良い漁場となる。漁場は南小松よりは北小松の方が多いが、南小松の魚は「がっしり、しまっている」。地域のよって魚の質が変わると言うことである。

漁業とは、その漁獲を販売することである。もちろん自家消費もあるが、つまりは商業である。魚以外にも松・クヌギなどの割木を作って湖の対岸、彦根・守山方面に売りに行く。

史料上は、農業中心の地域は山や耕地をめぐる争いが頻発するが、山林の伐採などは漁場に影響するので、川も考慮し、実は漁場も絡んでいるのでは無いかと思われてくる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 蔵持重裕、「中世菅浦文書について」、滋賀大学経済学部附属史料館『研究紀要』四五号、査読無、2012年、72～92

[図書] (計 2 件)

- ① 蔵持重裕、色波舎、『歴史における生活・生態史の連鎖と断絶—水辺集落の構成と展開—』 2012年、87
- ② 蔵持重裕、高志書院、『京洛圏の中世研究』 2011年、74～100

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蔵持 重裕 (KURAMOCHI SHIGEHIRO)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：70153369

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし